

～ 御蔵の変遷 ～

寛永 12 年以前：舟運の便利な湊村（橋津）に藩倉が創設された。
文化 3 年まで：棟数 16 棟を数え、橋津藩倉の最盛期
天保 14 年まで：蔵の特定はできないが、いくつかの御蔵が建て替
えられた。
明治維新頃まで：嘉永元年に駒帰御蔵が建て替えられた。この頃ま
で藩倉は、最盛期の規模を保った。藩倉が官倉に
改められたが、御蔵の棟数に変化はなかった。一
部が小学校校舎として転用されたほかは、農業倉
庫として米の貯蔵に活用された。
明治 25 年まで：この頃、管倉の全部が奨恵社に払い下げられた。
旧役宅が改築され、奨恵社の事務所が置かれた。
宝永御蔵は無くなり畑地となっている。
明治 41 年当時：鳥取中学校仮校舎や藩倉の材料を利用して、西御
蔵と山下御蔵の撤去跡に橋津小学校の新校舎が
建てられた。
大正 12 年まで：この頃までに古拾五間御蔵が現在地に移築され
た。また、駒帰御蔵と片山御蔵は、他の蔵とは異
なり白漆喰塗りの土蔵となった。
昭和 6 年まで：古、新、計量、駒帰、片山、三十間、計屋の 7 棟
の建物が残っていた。
現 在：現在残っている御蔵は、古御蔵、片山蔵、三十間
北蔵の 3 棟である。平成 16 年 1 月に棟札と共に
一括して鳥取県指定保護文化財に指定された。

～ 現在の御蔵 ～

現存する三棟の御蔵（「片山蔵」、「三十間北蔵」、「古御蔵」）
は、いずれも切妻棧瓦葺きの平屋建で、切妻の身舎に庇（尾垂）
が付いた土蔵造りであるが、それぞれに特徴がある。

【片山蔵】 桁行 5 間×梁間 3 間：8 尺 3 寸尾垂
元は桁行 15 間であった。大正末期から昭和 6 年に白壁土蔵造
りに改造された。昭和 30 年代に御蔵の西側（正面左側）2/3
が取り壊されて元の 1/3（「片山・巻」：桁行 5 間）になっ
たが、移築されずに創設時と同じ場所に建つ。

【三十間北蔵】 桁行 5 間×梁間 3 間：9 尺尾垂
元は桁行 15 間であった。昭和 26 年、南側（正面右側）2/3
は隣村に売却され現存していない。北側（正面左側）の 1/3
（桁行 5 間）が現在地に移築され、幸いにも今日まで残った。
この御蔵は「谷田絵図」に記載されている「三拾間・巻」に
相当する蔵で、三棟の中では最古である。西側の鬼瓦は鳥取
池田家の家紋「丸に揚羽蝶」の紋入り鬼瓦が載る。

【古御蔵】 桁行 12 間×梁間 3 間：8 尺尾垂
内部を三室に分けた三戸前。大正 10 年頃に移築されているが
往時の外観を有し、天井近くの地棟に立替え時（天保 14 年：
1843 年）の棟札が残る。北側の棟には揚羽蝶紋入り鬼瓦が載
る。



橋津藩倉創設 370 年記念
橋津藩倉を活用した地域活性化事業実行委員会
<事務局>
湯梨浜町教育委員会
〒680-0702
鳥取県東伯郡湯梨浜町久留 19-1
TEL. 0858-35-5367 FAX. 0858-35-5387



古御蔵



三十間北蔵



片山蔵

県指定保護文化財

鳥取藩 橋津藩倉



橋津藩倉の創設と最盛期

橋津藩倉は、鳥取藩の米蔵（藩倉）で、鳥取県内に現存する唯一のものである。

鳥取藩には鳥取、米子、倉吉の3藩倉の他に9箇所（蔵）の米蔵があった。3藩倉は藩士への俸禄米の貯蔵、米蔵は売却用の廻米の保管・積出しを担当していた。

鳥取藩は、藩財政を賄うため、農民からの年貢米を武士等に対する俸禄米とは別に、大坂方面に廻米して売りさばき、現金収入を得ていた。換金用の廻米は、海上輸送に便利な海岸沿に設けられた倉庫に貯蔵していた。その倉庫を米蔵といい、橋津のほか岩本・大塚・浜村・青谷・由良・逢東・赤碕・御来屋・淀江にあった。なかでも、この橋津藩倉は、最大のものだった。

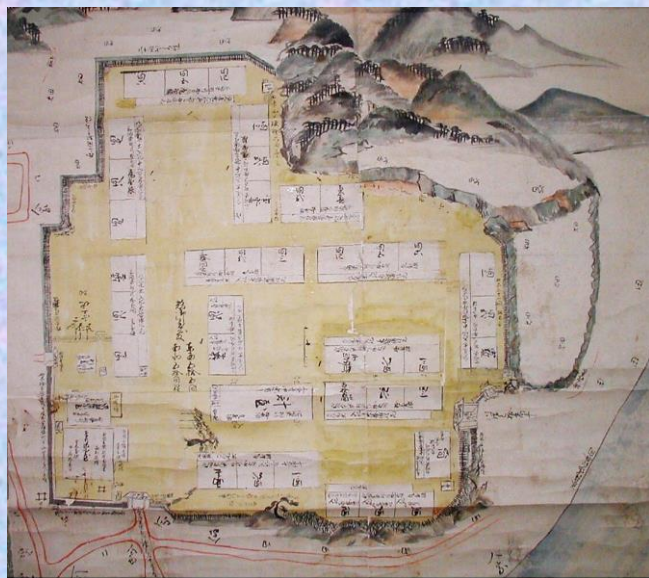
創設年代は不明だが、鳥取藩政資料の「万留帳（よろずとめちよう）」（家老日記）によると、少なくとも寛永12年（1635）には存在していたが、現在地に創設されたのは正保2年（1645）であった。

橋津藩倉は長大な御蔵15棟と計屋があったことが絵図によって確認されている。建坪は612坪であった。

旧河村郡（現湯梨浜町、三朝町）79箇所村と旧久米郡（現倉吉市）31箇所村から、天神川・東郷池・橋津川を利用して毎年17,000石（42,500俵）の米が運ばれ、多い時には20,000石（約50,000俵）の米を収納したと言われている。

また、倉吉藩倉の納米のうち藩士の家禄を給与した残米も橋津藩倉に回送され、貯蓄移出に備えられた。

御蔵の警備は日頃から厳重で、御蔵に仕える人夫37~38人、各村からの人夫約300人が交替で責任分担し警備を行っていた。消火用具も完備されていた。



橋津藩倉御蔵之絵図（通称：谷田絵図、鳥取県立博物館蔵）

寛政5年（1793）～文化2年（1805）頃に作図されたと推定される。昭和8年、谷田亀壽（郷土歴史家：故人）が元普請奉行の大塚章蔵書類中から発見したため谷田絵図とも呼ばれている。



棟札

建物の建築・修築の記録・記念として、棟木・梁など建物内部の高所に取り付けられた札である。天保14年（1843）に古御蔵を建替えたことがわかる。「新蔵」、大工は「辰蔵」とある。

「古御蔵」の梁に取付けられた棟札



竜吐水（古御蔵に展示）

竜吐水（町指定文化財）

御蔵に常備されていた消火用具。水槽の側面に「橋津」、「御蔵所」、「文久元年作」、「角輪印（鳥取藩の舟印）」の文字や記号が鮮明に残っている。橋津藩倉は、当時、「橋津御蔵所」と呼ばれていたことを示す貴重な資料である。



橋津藩倉の鬼瓦

鳥取池田藩の家紋「丸に揚羽蝶」が入っている。（橋津藩倉資料室に展示）



明治期の橋津藩倉の全景写真（尾中芳子所蔵）

この写真は、岩田勝市氏（鳥取市：1884~1955）の旧蔵の「奨恵社写真帖」に収載されていたものである。

写真左端に明治32年にできた登記所があること、明治41年に建築された橋津尋常高等小学校が写っていないことなどから、明治32~明治41年の間に撮影されたものと推定される。明治末期当時の橋津藩倉の全体像がわかる貴重な写真である。

廻米津出し作業

天神川流域の村々から出される年貢米は、川舟によって運ばれたが、その仕事は天野屋（古くから河村郡宗旨庄屋・大庄屋を勤める）が発行する「役目札」（鑑札）を持つ橋津住民の特権（専業）であった。廻米津出し（御蔵から海岸で待つ船への搬送）作業では、川舟によって、御蔵から川尻に、さらに灘辺に運ばれ、ついで道舟とよばれる運搬船によって、沖で待機している本船に運ばれた。

その際、米を積みだす村人たちは声をそろえて「葉茂し唄」を歌ったという。御手船（藩所有）は、1,000~1,500石積みで日本海を南下して、瀬戸内海経由で大坂中之島の鳥取藩の御蔵屋敷に運ばれた後、米商人により換金された。

当時、橋津には100石前後積の渡海船を所有し海運業を営む家が約20軒あり、商業活動が盛んであった。

藩倉ができた橋津村には近郷はもとより他国からの移住者も増え、輸送業者、船頭、船員、商人等が出入りし、賑やかな港町として発展した。

弁財舟

廻米は、弁財舟に米を積み、関門海峡を通り、瀬戸内の海を航行し大坂の鳥取藩の御蔵屋敷に納められた。



弁財舟の模型（橋津藩倉資料室に展示）



役目札

縦11.7cm、横9.5cm、厚さ2cmでケヤキ製。裏には、天野屋の焼印がある。

藩倉の終焉

明治初年時の藩倉の規模は、文化5年（1808）当時と同規模と推定されているが、明治4年（1871）の廃藩置県により藩倉はその使命を終えた。しかし、その後も鳥取県の官倉として貢租米の収納に用いられ、さらに、明治6年（1873）の地租改正後も代米納や貢租抵当預り米制度の米穀が保管された。

しかし、明治45年の国鉄山陰本線の開通により海運業は次第に衰退し、それと同時に橋津も活気を失っていった。

江戸時代、藩ごとにあった藩倉は、全国各地に相当数点在していたが、明治に入るとその役割を終え、それぞれ転用・売却・解体の歴史をたどっていった。

今に残る藩倉

時代の流れとともに姿を消し、現在、全国に残っている藩倉遺構はわずか4箇所（橋津、盛岡市、熊本市川尻・宇土市）となってしまう。橋津には、三つの御蔵（古御蔵・片山蔵・三十間北蔵）が残っている。藩倉は、江戸時代の経済・交通輸送の歴史を考える上で、貴重な歴史的建造物である。